時評

ひらがな・字空け

佐藤博之

短歌の雑誌「flipper」がこのたび連作短歌賞を新設し、有朋さやか「天性の蛇」が第一回flipper連作短歌賞の大賞に選ばれた。選考委員の一人として参加させて頂いた選考会の中での、二つの最終選考通過作の表記方法に関する議論について特筆したい。

平岡希望「めいそうの父、ぜんそくの母」は選考会の中で平仮名の多用の是非が、小渕紗世「緑夏」は連作の大半の歌に字空けのあることの是非が議論された。平岡の平仮名の多用について「狂気や怖さを増幅させている」と選考委員の鈴木智子が指摘し、田中翠香が「作り物感がぬぐえなかった」と反論した。小渕の字空けについては丘光生と田中が効果を疑問視し、佐藤・鈴木が「文体の範囲」と退けた。

・たんたんと洗いのこしをたんとうの父につたえず母にみみうち
　平岡希望「めいそうの父、ぜんそくの母」
・ああ、これは海の匂いだ　真夏日とあなたを分かつ境がにじむ
　小渕紗世「緑夏」

一昨年佐佐木幸綱の上梓した『春のテオドール』も平仮名の大胆な多用を特色とする歌集である。佐佐木は短歌の音楽性やイメージのため「読みのスピードにある程度ブレーキをかけるような表記」とその理由を述べた。仮名にひらくことにより個々の音についての意識や和語の持つ伸びやかさをより感じることができた反面、漢字としてのイメージや漢語のリズム感との引換要素もあり、歌集全体で見ると的に歌がおとなしくなる様に感じられた。

・たいふうのあめがうつまど　あさの卓にくちびるぬらし柿の実をくう
　佐佐木幸綱『春のテオドール』

また、仮名にひらくだけでなく、逆に漢字の多用や、正字で歌を詠むことにより独自の歌の文体を得る現代歌人も居て、心強い。

・大脳を十の議題と六十の詭辯で充し會議に臨む　堀田季何『惑亂』

字空けについては、特に学生短歌やその近年の出身者で盛んである。多用だけでなく二字空けや括弧などとの併用も見られ、表記の幅を大きく拡げたいとする活気が強く感じられる。

・複合の　入り組んだ　差異　劣等感　寒がりだよね和音のしびれ
　花澤希海「早稲田短歌」50

『春のテオドール』の後記にもあるが會津八一はほとんどの表記を仮名として歌を詠み、また字空けに関しては釋迢空が句読点と併用しながら独自の境地を拓いた。八一や迢空のスタイルは直接的に受け継がれず歌壇の主流とはならなかったが、その到達点は今も斬新である。勿論、表記の目新しさを内容や音律に活かすのは難しく、挑戦の中に調和を見い出すことこそが文学で目指すべきことではあるが、温故知新だけでなく、より斬新な到達点もまた見てみたい。そして見たこともなく挑戦的な表現を、常に受け留め続けられる読みの広さを持ちたい。

・あまごもる　やど　の　ひさし　に　ひとり　きて　てまり　つく　こ　の　こゑ　の　さやけさ
　會津八一『鹿鳴集』
・人も　馬も　道ゆきつかれ死にゝけり。旅寝かさなるほどのかそけさ
　釋迢空『海やまのあひだ』